

## 序

最近のこと、竹田米吉氏の「職人」という本を読んで、大変に感銘を受けた。竹田氏は明治22年、神田の棟梁の家に生まれて大工として育ち、後に早稲田大学に学んで、立派な建築家となられた方である。

本の内容は、氏の職人としての生い立ちに沿いながら、当時の建築職人の日常や、仕事のやり方、工事の方法などについて、滋味溢れる語り口で述べられたものである。

子供の頃、親方の家に住み込み、遠い工事現場へ、雨の日も雪の日も徒歩で通い、来る日も来る日も、兄弟子達に叱られながら大量の板の鉋掛けに追われ、帰り道は薪を背負って、疲労のため眠りながら歩いたというような日々を送った。そしてやがて、錦のような鉋屑を出すまでに腕を磨き上げるのである。

遙かに遠い昔話である。いま建築の世界には、こんな徒弟制度は影をひそめている。当時このような制度が行なわれていたのは、人々の意識、社会経済状態が違っていたことが根底にあるが、工法技術が長い間あまり変化しなかったことにもよろう。

現在こんな方法を探ることができないことは勿論であるが、ここではっきりしていることは、当時はその時代に則した技術技能の社会的教育制度が確立していたということである。それに対して現在はどうか。OJTという言葉がよくいわれる。何かというと意味ありげな外来語が口に唱えられ、それで万事解決というような風潮があるような感じがする。

去る建築学会秋季大会において、コンクリートの品質管理が問題として論議された。しかし、どんな分析が行なわれ、どんな新技術が開発されようとも、作ったものの品質を確保するには、所詮、直接手を下す者に技術技能が定着していることが決定的な要件である。そのためには、社会的な教育の道筋が確立していなければならない。

建設業の研究所というものは、新しい知識や技術を産出するだけでなく、作られたものの品質を良くするという面でも責任があるのが実態である。とすれば、技術の普及定着ということに、今後何か有効な方法を、関係者と共に考えて行くべきであろう。

1976年10月

清水建設株式会社研究所長

工学博士 鳥田 専 右